

Serenape : 文苑

著者	三四郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 9
ページ	2 5 - 2 5
発行年	1913-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/6432

元輔「白川のその水ひてちりたらむときにぞ君を思ひ忘れむ」

こ口吟みにつこりす

元輔「をさらば檜垣殿、いなり殿にも」

兩人別れを惜しむこなし、よき所にて幕

……一九一三、二、習作……

Serenape

小 曲

三 四 郎

しぐれ降る夜に「清常」^{キヨツナ}がへり
借りた蛇の目がしつとり濡れる
たのもしいよなまたそでもない
街の灯^ホかげのちらちらと。

こほろぎ

枯れた黄菊の葉のかけで
なくよこほろぎコ・コ・

Allegretto のその Note

うたう心が添はないが
あきらめの身のひとふしか！

ぼんた

文苑

雪のふる日のぼんたの心
あはせ鏡のとつをいつ
ぎつとしごいた帯今宵
酔つて歸ればなほよかろ。

小 太 鼓

芝居のはねの小太鼓が
トロ／＼と、と鳴る宵は
遠いそなたを想ひ出す

なせか知らぬがたもひ出す。

歳晩書懷

一ノ乙 齋藤 護國

讀書十歲學未成。
今年又盡何匆忙。
一片意氣蓋天下。
半生心事有誰妨。